

佐藤^{ヘンリー}顕理とその書物の話

奥 正敬

■はじめに

江戸時代末期に幕臣の子に生まれ、明治時代になると堪能な英語を駆使して多くの著作を記した佐藤顕理(1860-1925)。英語教師やジャーナリストとして活躍しながらも、現在は殆どの人から忘れ去られてしまいました。彼は不屈のイギリス国王ヘンリー8世にあやかって「佐藤ヘンリー」と名乗るなど、当時の日本人としてはユニークな部分を持っていましたが、明治の世にあって幕末の徳川体制を支えた人々を外国へ知らせた人物です。ここでは、ジャーナリストの石塚博氏が日本語に翻訳した顕理の英語自伝『サムライボーイ物語』⁽¹⁾を参考にして顕理が残した書物を振り返ります。

■武士の子として英語を学ぶ

佐藤顕理は1860年、即ち幕末の万延元年に江戸で生まれ、本名を重道といいます。幕臣の中では旗本に次ぐ御徒の家の子で、父親は長州征伐で戦死していました。満6歳で家督を継いだ顕理少年は、祖母と母から武士としての厳しい教育を受け、慶応三(1867)年の大政奉還後には家族に伴われて主君徳川慶喜が謹慎する駿府へ移りました。

一大名となった徳川家によって駿府の地名が静岡と改められる中、明治三(1870)年には同家の学問所に入り、お雇い外国人の教員やキリスト教宣教師から学ぶ英語に高い才能を示すようになったそうです。

明治四(1871)年の廃藩置県を経て沼津中学校に移り、学びながら英語の教鞭をとるといふ、今では考えられない生活を送っています。因みに、この中学校は徳川家の兵学校から移行されたもので、薩摩や長州出身者を中心にした新政府への迎合を由としない人たちが、外国語と西洋知識を身に付けて民間へと進出していく学問の場となり、のちに「沼津洋学」と称される学風が築かれたそうです。それは、顕理が受けてきた「二君に仕えず」とする直参武士の家庭教育と一致するものであったのではないのでしょうか。

■多彩な経歴とその折々の書物

顕理は静岡師範学校の教員を経て明治十三(1880)年に上京しました。英文家として身を立てるため、英語雑誌に日本文化を紹介しながら

ら実力を高め、明治十五(1882)年から農商務省の管船局に務めています。この時点で薩長閥中心の新政府への仕官を戒めた祖母や母の教えに背いたわけですが、3年後には退職して東洋英和学校や学習院でも教鞭をとっています。同時に、この頃から翻訳書や英語学の書物を作り始め、明治十八(1885)年には『Anglo-Japanese Conversation Lessons』や翻訳書(サンダー著)『ユニオン第三読本』を刊行し、続いて明治二十(1887)年には『実用英語初歩』、さらには明治二十一(1888)年の『英語発音解』や『英文解』など教科書類の執筆で英語教師として論理面で主張するようになります。

その後も断続的に教師としての活動は続き、東京高等商業学校や驚くことに軍部中枢の憲兵司令部でも英語を講じています。しかし、明治二十七(1894)年に日清戦争が始まると政府に協力して広島大本營で英文通訳に従事し、薩長閥でなく長崎出身でのちに総理大臣となる伊東巳代治内閣書記官長のもとで講和条約の締結にも携わりました。この後も英語研究の著作は増え、明治二十九(1896)年に『英語活用新書』、明治三十(1897)年の『実用英語階梯』など精力的に執筆しています。

明治三十一(1898)年には伊東巳代治農商務大臣のもとで商品陳列館の館長に就任します。在任中の明治三十五(1902)年には、彼の英語学の著作の中でのベストセラーとなった『英語研究法』を上梓し、英語研究者の間で教授観と学習観が賛否両論を交えた反響をよぶことになります。⁽²⁾翌、明治三十六(1903)年には自分の職業研究である『貿易事情』を執筆するなど著作の刊行にいとまがありません。

顕理はこの陳列館長時代の明治三十七(1904)年にアメリカのミズリー州で開かれたセントルイス万国博覧会に出張し、この地で存在感を発揮して日本の貿易拡大活動に貢献し、翌年辞任しました。

■幕臣の心で幕府開明派の人々を紹介

このように顕理は教員を通じて英語の実力を高め、やがては家族を挙げて交わりを避けていた明治政府に出仕しています。これは英語による発信で国家への貢献を目指そうとする顕理の考えと、西欧諸国との交流で近代化を急ぐ明治政府の政策とが交わった結果と考えられます。しかし、彼が長く官吏として留まることはありませんでした。

顕理の出版物も当初は英語学を中心にしたも